エアランガ教育勲章を受賞して

文・写真　濱田泰三（歯学部教授）
Hamada, Taizo

五月二日はインドネシアの国で制定した〝教育の日〟であり、全国各地で色々な行事がとり行われる。この日は、日本の〝文化の日〟に似ているとの説明を留学生からうけている。

インドネシアの大学ビッグファイブといえば、国の指導的立場の人材のほとんどを輩出してきた五大学であるが、そのひとつであるエアランガ大学（スラバヤ市）より、私はこの五月二日にエアランガ教育勲章を受賞した。

受賞者は五名、すなわちノエル氏（七十八歳・元学長・元駐仏大使）、ハルトノ氏（六十八歳・元エアランガ大学教授）、ニクソン氏（故人・元マンチェスター大学教授）、グラント氏（六十六歳・元マンチェスター大学教授・現在オーストラリア在住）、そして私であった。故ニクソン氏の代理としては、マンチェスター大学教授のマッコード氏が出席した。

本賞は、昨年中に内定はしていたが、省庁への手続段階において、外国人は対象外であるという規則の処理をめぐって時間がかかり、今日まで延期されてきたものである。

エアランガ大学歯学部の指導的立場の人のほとんどは、これまで英国留学者で占められていたが、ここ二十年近くの広大、私どもとの交流の結果として、広大留学者の中からも教授一名（イスカンダール氏）と講座主任一名（スープラプト氏）が生まれ、博士号（Ph.D）取得者も既に六名を数えている。うち四名は、私どもとの間のサンドイッチプログラムによるものである。

サンドイッチプログラムとは、エアランガ大学大学院に入学後、一年間は主に基礎的なことを学び二年目に来広し、広大で研究（ここでの研究がサンドイッチの中身になる）、そして三年目には自国で総まとめをやり、最終試験には私がインドネシアに出向くというものである。

上記の者のほか十名近くがこれまでに私どもの研究室で学び、帰国している。

今回の受賞者五名の功績調書によると、一九七〇年代から今日まで二十年以上にわたる人材育成の功績が顕著であるということであった。五月二日当日は、在スラバヤ日本総領事の松本俊氏、副総領事の萩島雅洋氏をはじめ、ブリティッシュカウンシルの方、インドネシアの他大学の代表、またエアランガ大学の各学部長など多数の来賓であった。授賞式後、各学部長と受賞者、ブリティッシュカウンシルの方々を交えて、副学長の司会のもとに国際交流のあり方についての会議がもたれた。

エアランガ大王をモチーフにした18Kゴールドの勲章と豪華な賞状が手渡されたが、式典の盛大さ、出席者の顔ぶれ、インドネシアでの新聞報道（全国紙Jawa Pos一回、地方紙Surabaya Post二回）の取り上げ方に加え、本賞が故人にまで授与されたこと、さらにまた、発展途上国では稀なことに、諸経費など全てをインドネシア側が負担したことなどを考え併せると、本賞の重みを改めて実感する次第である。

プロフィール

（はまだ・たいぞう）
◇一九四四年生まれ
◇一九七三年　大阪大学大学院歯学研究科博士課程修了歯学博士
◇歯学部歯科補綴学第二講座教授
◇専攻　歯科補綴学・オーラルリハビリテーション・老年歯科